ファンタジスタクランチ～悪魔王の呪い～

ＳＨＪ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジスタクランチ～悪魔王の呪い～

【Ｎコード】

Ｎ８８１６Ｘ

【作者名】

ＳＨＪ

【あらすじ】

２０年後に再び復活を遂げる輪廻の悪魔王デオグルグ。その悪魔を封印するべく、一人の巫女とお調子者の護衛が立ち上がる。剣とか魔法とかの世界のファンタジー作品／サクサク読める様に、１話１話を短めに作っています。無理でした（笑）

・プロローグ

２０年に1度、ここ王都アルカパサでは盛大な祭が開催される。

その祭りは、悪魔王デオグルグを封印する旅に出た巫女が帰ってくる事で盛大に開催されるのであった。

しかし、その悪魔王も２０年を得てまた新たに復活するので、次の封印の旅に出る巫女もこの祭で決められるのだ。

２００年もの間、こうして悪魔王から世界は守られて来たのだ。

そしてまた…ここに、一人の巫女が決された。名をメルディア・エシャロットと言い…古代の言葉で『聖なる天の使者』と言われ、その名の通り強い力を持った巫女が誕生したのである。

この時、まだメルディアが幼少の時であった…

それから幾年が流れ…

再び悪魔王が世界に現れた…。

・プロローグ（後書き）

キャラクター紹介は、第1話からちょくちょくしていきます。

第1話：護衛（前書き）

小説の題名が思い付かなかったので、意味は無いです（笑）

第1話：護衛

「うぬぅ～…ふむむ…」
王都アルカパサの町の一角、小さな社に頭を抱えて悩む女の姿があった。
年の頃、成人を越えてまだ若いであろう女は、床に座り何枚もの紙を見ながら悩んでいた。
「ふむぅ～…ぬぬぬ…」
その幾多の紙には、年の瀬がバラバラな戦士やら剣士やら魔法使いやらの姿と、その者の性格や能力が精細に描かれていた。
「うぬぅ～、酷な話よのぅ…この中から決めないといけないとは…」
この女は、２０年前の祭で決められた巫女。メルディアであった。
悪魔王復活に伴い、封印の旅に出る事が決まったのであるが、その旅のパートナーである巫女の護衛を決めなくてはいけないのだ。
そしてその護衛は、旅が終われば婿として迎えなければいけない決まりがあった。
その為か、紹介された婿候補達は、全て金持ちの箱入り息子みたいな者ばかりであった。

悩むメルディアにお構い無しに、社の扉が乱暴に開かれた。
「メル様ぁー！何故、わたくしを選んで下さらぬ！」
見た目は真面目そうで、腰に6本の剣を差した若者が社に転がり込んできた。
「言っておるじゃろ！この旅は危険を伴う旅じゃと！お主の様な貧弱な者と旅など出来ぬわ！」
メルディアは、一寸だけ若者に目をやるとすぐに婿候補の紙に視線を落とした。
「このキルト！メル様の護衛を果たすために日々精進をして参りま

した！」
若者――キルトは、涙ぐましく天を仰ぎメルディアを見つめた。
このキルトとは、小さな頃から一緒に育ってきた様な幼馴染みなのだ。
確かに、剣の腕前は婿候補と比べ若干ながらキルトの方がまだマシなのだが…一生のパートナーとしては、性格に難ありと言った所である。
しかし、悩めば悩むに連れて…封印の旅が危険な事には変わりなく、箱入り息子と旅に出て失敗するよりか…このキルトを連れて行った方がまだマシだと言える訳でもあった。
メルディアは散々悩み、苦汁を飲みその結果…キルトを護衛に選んだ。

「メル様！わたくしを護衛に選ぶと言うことは将来は、このキルトと結ばれると言うことで間違いありませんね？」
「うぬ…まぁ、掟が掟じゃからな…しょうがあるまい」
キルトは、目を輝かせ涙をボロボロと溢しながらその場で舞い踊る。
「ああー！精霊のご加護があらせられますように！遂に、メル様がわたくしを選ばれた！」
このハイテンションに踊るキルトを尻目に、頭を抱えてため息をつくメルディアの姿があった。
「メル様！早速、将来の為に！今後メル様の事を呼び捨てで呼んでもよろしいでしょうか？」
キルトは片膝をつき、メルディアに片手を伸ばし答えを求める。
護衛を決める事＝婚約と取っても過言では無い……のだが、メルディアはズカズカとキルトに近づくと胸ぐらを掴んだ。
「調子に乗るのでないぞ！私は巫女！お主は護衛！お主の働きにより、私はこの掟を破棄出来るのであるぞ！」
もちろん、そんな権限はあるわけ無いのだが、その言葉を聞いたキルトは震え上がりメルディアの手から逃げ出すと正しい姿勢で座り

直し頭を下げた。
「分かったのなら、もう行くのじゃ」
メルディアがキルトを睨む。キルトはまた深々と頭を下げて社から出ていった。
数分ほど、社の扉を睨み続けそして視線を落とし頭を抱えた。

やはり、箱入り息子と旅に出れば良かったかと深く後悔する。
あの性格が、何年経っても慣れないのだ…。
しかし、もう決めてしまった事に後悔してもしょうがないので、明日から始まる長い旅の支度をモソモソと始めた。

第1話：護衛（後書き）

☆キャラクター紹介☆

巫女：メルディア（通称：メル）

秘めた力がある。言葉使いが、古くさいがまだまだ若い。

護衛：キルト

お調子者。一緒に居ると疲れる。性格に難あり。

第2話：罪人

「それでは、巫女様…コチラの剣をお持ち下さい」
一人の神官が、1本の剣を差し出した。
その剣は、いくつもの術式が施してあり、強い魔力を感じる程の黒刃の剣であった。
「こちらは、悪魔王封印の為に先代の巫女様から代々受け継げられてきた封印の剣でございます」
メルディアは、差し出された剣を受けとると、全身にピリピリとした魔力が走り渡った。
代々受け継げられてきたと言うことが、持っただけで分かる強い魔力であった。
「ふむ…私は、剣など振ることさえままならぬのじゃが」
「大丈夫でございます。巫女様は、剣を振らぬとも、その封印の剣は悪魔王を封印してくれますぞ」
しかし、メルディアには分からない事があった。強い魔力を放つ剣なのだが、何故この剣は悪魔王を20年しか封印する事が出来ないのか…。
「メル様ぁ～！お任せ下さい！わたくしが、もしもの時にご一緒に剣を振りますゆえに…」
「黙るのじゃ！！」
皆が真剣に話している場でも、全く気にせずにいつもの調子で話すキルトにメルディアは、怒りを表す。
この封印の剣が人間に効くのであれば、今すぐにでもキルトを封印したい気持ちはあったが、ぐっと抑える。
もう、どう転ぼうにもキルトとの婚約はねじ曲げる事は出来ないのだから。

「巫女様。コチラが今回の旅の罪人でございます」
今度は違う神官が、手錠をはめてボロボロの布を身に纏った罪人を連れてきた。
「ふむぅ…何故、罪人など必要なのじゃ？旅のお供に、１００歩譲ってキルトを連れて行くと決めてあるのに…」
メルディアは、罪人の顔をじっと見つめた。
顔は泥や埃であまり見えないのだが…まだ、メルディアよりも若い少年であった。
「はい。それについては、今ご説明を致します」
神官は頭を下げてから今回の旅の事について語りだした。
「悪魔王の封印の旅と申されても、悪魔王は５つの魂に別れております。巫女様は、５つの魂をコチラの罪人に移し代えて最後にこの罪人ごと悪魔王を封印するのが目的でございます」
「なぬ？お主は私に、人を殺せと申すのか！」
あまりに、平然に当たり前の様に話す神官に怒りが込み上げてくる。
「人ではありません。５つの魂を移し代えれば、それは既に悪魔王でございます」
「そう言う事を言ってるのでは無いわ！罪人とて、人は人であろうが！魂を移し代えた所で、それは既に人を殺すと代わりは無いわ！」
例えそれが世界を救う為だと言う事ではあるのだが、人を犠牲に世界を救うと言うのは間違えているとしか考えられなかった。
「巫女様。この者は、死んで当然の者でございます」
「なんじゃと？」
「メル様ぁ～！コイツは、既に人を殺した重犯罪人ですので、死んで当然なんですよ」
必死に笑いをこらえながら話すキルトに、再度メルディアは一喝を入れる。
「その者が、人を殺めていようが無かろうが…人を犠牲にしてまで封印は出来ん！私は、他の方法を探す！」
神官に指を差しビシッと言い放つが、神官は一つため息をつくと首

を横に振る。
「それ以外方法は、ございません。先代の巫女様達は、やはり他に方法を見つけようと努力しました……が、結局は罪人を犠牲に致しまして、今の平和が守られていますのです」
きっと、死に物狂いで他の方法を探したに決まっている。先代の巫女達が、旅から帰って来るときは、心なしか皆暗い表情をしている。旅の疲れか、と思う人も居ると思うが…一時の平和の裏では、人を犠牲にする方法が取られていたのだ。
もはや、そこまで言われてしまえば…反論の余地もなくメルディアは致し方なく罪人を犠牲にする形で手を打った。

「巫女様…後こちらをお持ち下さい」
神官が新たに差し出した物は、銀細工の綺麗な銃であった。おかしな所は、弾を入れる所が無い。
「コチラは、魔法銃と言いまして…巫女様自身の魔法力を銃に注ぎまして、それを纏めて放出出来る物でございます」
「そうか…でも、私は精霊術が使えるので必要無い気がするのじゃが」
いかにも重そうな銃を見下ろす。封印の剣に魔法銃まで持つと、それだけで大荷物になってしまう。
すると、横から得意気にキルトがしゃしゃり出てくると、神官から魔法銃を奪う。
「こちらは、わたくしがお持ちします！逃げ出しそうになった罪人を巫女様の代わりにこの魔法銃で撃ち殺して差し上げます故に」
弾の入っていない魔法銃を罪人に向けると、躊躇なく引き金を引いた。
カチッと魔法銃の音が社に響き渡る。
「バカ者！銃を人に向ける奴があるか！」
メルディアのゲンコツがキルトの頭に綺麗に入ると、魔法銃を奪おうとするが…キルトは頭を押さえながらメルディアを拒んだ。

「も…申し訳ありません。しかし、この魔法銃はわたくしがお持ちしています」
キルトは足軽に後ろに飛びはねながら下がると、魔法銃を自分のベルトに押し込んだ。

「巫女様、それでは…最初にアルカパサ出てを西に行きますとマケルの森がございます。それほど、大きな森ではございません。森を抜けますと、近くにリンリンの村がございます。その村の神官に、第1の悪魔王の呪いの場所をお聞き下さいませ」
あまりに、長い神官の言葉1つ1つを頭に刻み込みながら頭の中で確認をしていく。
神官から地図と食糧7日分を渡される。メルディアは、忘れ物は無いかと確認をしてから、社の扉を開いた。

「巫女様いってらっしゃいませー！」
「巫女様！お気をつけて！」
「キルトー！しっかり巫女様をお守りするんだぞー！」
社の扉から外に出ると、アルカパサの町の全員が集まっており、町の出口まで道を作っていた。
「みんな！心配すんなって！このキルト様が、世界を救う巫女様の護衛なんだからな！」
キルトは大ハシャギしながら町の者に大きく手を振り道を歩いていく。
「ふむ…それでは、行ってくるぞ」
背中越しに神官に手を振りメルディアは、歩き出した。その後ろから、ジャラジャラと手錠を鳴らしながら罪人も歩き出す。
「巫女様！お気をつけて！」
「巫女様！いってらっしゃい！」
騒ぐ町の者に軽く手を振り、出口に向かっていく。

「あっ…あれが、今回の罪人ね」
「これで人を安易に殺せば、必ずしも我が身に降りかかるって思いしったわね」
ヒソヒソと話してるつもりだろうが、道を挟んで前にいる町の者にも聞こえる声で町の人が話し出している。
しかし、罪人は聞き流しながらメルディアの後をついていくだけであった。
「あの罪人ね…北の大陸にある王都ケセルヌアの領主様を殺したそうよ」
なんとなくメルディアは、その話に聞き耳をたてるが、町の人達の声によって書き消されてしまう。

町の出口に着くと、メルディアは後ろを振り返り町の人達に手を振った。
町から大歓声が上がり、その声を背中に受けながら、キルトそして罪人を連れて旅立った。

第2話：罪人（後書き）

☆用語☆【魔法銃】魔法の銃。自身の魔法力を練り込み放出する事が出来る。キルトには、魔法の力が無いのだが…何故かキルトが持っている。／／【精霊術】この世に存在する精霊を呼び出し攻撃とか回復とか出来る。精霊術は、限られた人にしか出来ない。これが使える者は、大抵巫女に選ばれやすい貴重な術。／／【罪人】世界の平和を守る為に旅に同行することになった。しかし、その罪人の役目は犠牲になる…つまり人柱になる事である。

第3話：旅立ち

「いやー…にしても、町の外に出ることなんて滅多に無いですからね～なんか新鮮ですねー」
町からだいぶ離れた場所で、キルトが背伸びをしながら話しかける。
「そうじゃの…」
メルディアは気の無い返事をすると、後ろをついてくる罪人に目をやった。
さっき、町の人間が話していた話が気になっていたのだ。
北の大陸にある王都ケセルヌアでの殺人。遠く離れた場所にある地で、わざわざこの東にある大陸に来たのであろうか…。
「うむ…そうじゃったな、そう言えば自己紹介がまだじゃったな」
メルディアは、罪人に声をかけた。一緒に旅をする者として、いつまでも名前を知らずに罪人と呼ぶわけにはいかないと思ったからである。
「私は、まぁ知っての通り巫女のメルディアじゃ。メルとも呼ばれておる。アッチに居るのは、護衛のキルト。お主の名はなんと申すのじゃ」
これからヨロシクと言った意を込めて、メルディアは握手を求める為に手を差し出した。
しかし、罪人は無言のままメルディアの前を通りすぎる。
「貴様ぁー！メル様が、綺麗な手を貴様の様な汚ない罪人に手を差し出しているのに関わらず無視するとはな！」
キルトが怒りを露にしているのを横目に見て、また無言で歩き始める。
「メル様！あんな奴、罪人1号で十分です！」
ギャアギャア叫ぶキルトを無視しながら、罪人の背中を見つめた。
寂しそうな背中であった。何か冷たくて重いものを背負っている…

そんな感じもする。
「こらっ！待て罪人１号！それ以上離れると、この俺様の華麗なる剣技で貴様を切り刻んでやるからな！」
バタバタと騒がしくキルトが罪人を追いかける。
先の方で、罪人が立ち止まり早く来いみたいな視線を投げていた。
しかし、その顔も無表情にだが…
メルディアもキルトの後を追い走り出した。

「ふむ…ここは、マケルの森じゃな」
町を出てしばらく歩いていると、目の前に大きな森の入口が飛び込んできた。
「そうですね…やっと、森に着きましたね」
はぁはぁと息を荒立て、すっかり疲労に満ちた顔でキルトが返事を返す。

この森に着くまで、幾度となく魔物が襲いかかってきたのだ。
キルトは、得意の剣技で対応し…メルディアは、精霊術で応戦した。
しかし、罪人は戦うこともせずにボーッと立って二人の戦いっぷりを見ていたのだ。手錠をされていては、戦う事が出来ないのだから、当たり前だが。
「つまり、この森を抜ければリンリンの村に行き着くのじゃな」
薄暗い木のトンネルが大きな口を開けている。

「と言うよりも…待ってください…」
キルトが息を整えながら罪人を睨む。
「おいっ貴様！さっきから、魔物が出てきても突っ立って傍観してるだけで！攻撃の１つもしないなら、前線で戦う俺様の盾になれ！お前なんかどうせ死んだって良い奴なんだから、少しは役に立て！」
罪人は、無表情でキルトを見てまた無言で歩き出す。そんな罪人の

態度に、キルトの怒りは増すばかりであった。
「キルト！落ち着くのじゃ！共に旅をする仲間なんじゃぞ！変な言い方をするんでは無い！」
「共に旅をする仲間ですかぁ？巫女様！冗談言ってる場合では無いですよ！あんな汚くて穢らわしい人間のクズが、巫女様とわたくしの仲間ですか？」
心底嫌そうな顔を見せるキルトに、目もくれずメルディアは歩き出した。
「あんなクズが…仲間だなんて…あんなクズが…」
後ろでブツブツと呟きながら、渋々歩くキルト。
入口から見た感じでは、薄暗くて気味が悪そうな森だったが…中に入れば、陽当たりも良く静かで綺麗な森であった。
「ふむ…この調子であれば、今日の夕方頃にはリンリンの村に着くであろう」
魔物の気配も無い。無防備な罪人が先頭を歩いていても問題は無いだろう。

メルディアは、しばらく歩いていてある違和感に気づいた。いくら魔物の気配が無いと言えど、少しばかりは襲ってきても良いはずなのに…先程から、何も襲ってこない。森の外では、息つく暇も無いくらいに襲ってきたのに…。
そんな違和感も虚しく、魔物が襲ってこない理由がすぐに分かった。
森の中部辺りであろう…。少し開けた場所に、魔物が陣取り周りの雑魚モンスターを森から追い出している。
「あれは…キラーラカントか？」
辺りに緊張が走る。
この辺りには、そんな魔物は出没しない筈なのだが、目をギラギラ光らせて、二本足で立ち大きな斧を持った犬型の魔物であった。
「コイツは厄介な魔物ですね…」

キルトは、腰に差してある剣を抜くとキラーラカントに向けた。キラーラカントも、メルディア達に気づくと威嚇をし戦闘態勢に入る。罪人は、巻き込まれない様に茂みの影に隠れ始めた。
「おいっ貴様！あいつの攻撃を受ける盾になれ！逃げるんじゃ無い」
もう、慣れたと言わんばかりの罪人に対してキルトが叫ぶ！それが、仇となりキラーラカントがキルトに襲いかかる。
「よそ見をするなキルト！」
メルディアが叫びそして、意識を手の中に集中させる。熱く燃える赤い炎を頭の中で描く…
「火の精霊ウルマナンテ！」
メルディアが両手を魔物に向けると、手の平から火の玉がキラーラカントに向かって飛んでいく。
キラーラカントは、不意をつかれたのか一瞬身動きを止めて、火の玉を弾き飛ばす。その隙をついて、キルトは横に飛び難を逃れた。
「キルト！今は、奴に集中するのじゃ！」
キルトは舌打ちをし、キラーラカントに襲いかかる。剣を振りかざしてキラーラカントに振り下ろす。しかし、その分厚い毛皮は剣の刃も通さなかった。
「火の精霊ウルマナンテ！」
再度、メルディアが後方から魔法を放つ。一度弾き、その威力を知ったのか今度は避けも弾きもせずに火の玉に突っ込みながら斧を振りかざす。
「巫女様！」
どうしても、精霊術を放った後は、少しの間体が動かなくなってしまう。火の玉は完全にキラーラカントを捉えたが、舞い上がる爆風の中…砂埃を断ち斬る様に、巨大な斧が姿を現した。
「うぬ…これはマズイ」
まだ、体が動かないメルディアに斧が振り下ろされる。そこに、キルトががむしゃらに投げた剣が奇跡的にも斧に当たり軌道がズレた。その間に、硬直が解けたメルディアは後ろに飛ぶ。

間一髪であった。斧は、メルディアが立っていた地面にのめり込んだ。
しかし投げた剣は、キラーラカントの剛力により刃の根本からポッキリと折れてしまった。
「あぁぁぁぁ〜！銘刀：麒麟刀が…真っ二つに折れた…」
投げた本人は、少しでも隙が出来たらと投げたつもりであったが、まさか折られるとは思っていなかった様だ。
さてはともあれ、キラーラカントの強さに手も足も出ない状況に追い込まれたメルディア達は、キラーラカントと一旦距離を置いた。
逃げ出そうにも、キラーラカントの脅威的な脚力で追いつかれそうだし…攻撃しようにも、魔法が効かなければ意味が無い上にその後の隙で攻撃されてしまえば一貫の終わりだった。
キラーラカントは、目をギラつかせジリジリと距離を詰めてくる。

その時であった…

何かが太陽の光に反射し、飛んでいくのが一瞬だけ見えた。
それが何だったのか…分からなかったが、すぐに理解する事が出来た。
幸運にも、キラーラカントはキルトとメルディアの2人しか目に入って居なかった。
物陰で見ていた罪人は、静かにキラーラカントに近寄り、先ほど折れた剣の刃をキラーラカントめがけて投げ飛ばしたのだ。
見事、刃はキラーラカントの目に突き刺さる。魔物は、大きく身をよじらせた。
「メル！地面に魔法を放て！」
罪人が叫ぶ。
メルディアは、無我夢中に魔法をキラーラカントの足元に放つと大きく砂ぼこりが上がる。
その隙に、罪人は道無き森の中に走り出した。それにつられて、キ

ルトと硬直が解けたメルディアも走り出す。

道のりを歩けばそれほど大きく無い森だが、道を外れれば迷いそうになる大きな森だ。
しばらく走った所で、メルディアは後ろを振り返った。魔物が追ってくる気配は無い。
息を整えその場に座る。
罪人とキルトもまた、その場にへたり込んだ。

「しかし…この森は迂回する事も、道を外して出口に行くことも出来ぬはずじゃったな。今日は、ここで野宿をするかの」
森に入るまでの魔物の襲来とキラーラカントの戦闘により、体力の限界だったキルトは、野宿と言う事よりも休めると言う事に賛成し首を縦に振った。

第3話：旅立ち（後書き）

☆用語☆【銘刀：麒麟刀】…武器屋のオヤジが自慢していたのを高い金を払って買ったのだが、あまりに耐久性の低さにキルトは怒りが増すばかりであった。しかも、切れ味が悪い。／／【武器屋のオヤジ】…キルトの事が嫌いなアルカパサのオヤジ。普通の剣を銘刀と称して売った事がある。／／

第４話：新しき仲間

パチパチ…パチパチ…
焚き火の音が静かな森に響き渡る。
焚き火を囲む様にメルディアとキルトが座り、罪人は微かに焚き火の明かりが届く位置に離れて座っていた。
「しかし…あんな強い魔物が、この森に住んでいたとは意外じゃったな」
「ええ…そうですね」
焚き火が消えない様に、薪をくべながらキルトが返事を返す。
「そう言えば！お主、やっと口を聞いてくれたの」
嬉しそうにメルディアが、罪人に話しかけるが…罪人は、聞こえないフリをしているのか暗くなりかけている空を見つめていた。
「貴様！いい加減にしろっ！」
キルトが剣を掴み立ち上がるが、メルディアはそれを制止する。
「どうじゃ？頼むからお主の名前を教えてくれぬか？」
再度、メルディアが問いかける。罪人は、少しだけ反応したかに見えたが、口を開く事は無かった。
「うむ…心を開いてくれぬのぅ」
「巫女様！あんな奴は、罪人１号で良いんですよ！名前なんて必要無いですよ！」
キルトは、ガラガラと焚き火の中に乱暴に薪を放り込みだした。メルディアが、しょっちゅう罪人の事を気にするのが気にくわなかったからだ。
「んっ？お主…怪我をしておるな？」
メルディアが不用意にも、罪人に近づきそうになったのでキルトは慌てて制止する。
「大丈夫じゃ。お前は、焚き火を見ておれ！火を消したら許さぬぞ」

キルトの制止を振り切り罪人に近づくと罪人の手にそっと触れた。
「見せてみろ」
罪人は、顔を会わせずに手錠に拘束された手をメルディアに差し出した。
さっきの、キラーラカントの戦いの時に…キルトの銘刀：麒麟刀の刃を投げた時であろう。手のひらがバッサリと切れていた。
「待っておれ…今、治療をするからの」
目を閉じて頭の中で想像する。水の流れる音…せせらぎ…優しく傷を癒す力へと…
「水の精霊アクア」
メルディアが手を差し出すと、次第に罪人の傷が癒えていく。
罪人は、無表情で自分の手が癒えていくのを見つめていた。メルディアの後ろでキルトが、鬼の様な形相でコチラを睨んでいたが、気にはしなかった。
「さっきな…お主が私の名前を呼んでくれたのが、嬉しかったぞ」
メルディアがボソッと話しかけた。罪人は、少し照れた様にあさってての方を見てから口を開いた。
「……ねぇよ」
あまりに小さな声で聞き取れ無かったが、メルディアは驚き罪人の顔を見た。
「今、なんと言ったのじゃ？」
手の傷は完全に癒えると、罪人は手を引っ込めた。
「俺に、名前なんてねぇよ。産まれてからずっと…名前なんてつけてもらった覚えがないんだ」
「名前が無いじゃと？」
そんなメルディアの問いに答える気も無く、木の根っこを枕にして横になった。
「貴様！巫女様がわざわざ貴様の為に魔力を無駄にしたのにも関わらず！その態度はなんだ！！」
キルトが叫ぶ。二人でコソコソ話をしていたのも気にくわないが、

罪人のクセに人を小バカにした態度が一番気にくわなかった。
「巫女様ありがとよ」
罪人が背中越しに手をヒラヒラと振る。
「ぬぬっ…お主、さっきは名前で呼んでくれたのだから、名前で呼んでくれなのじゃ」
メルディアがぼやくが、罪人は無視して寝息をたてた。
「メル様！そんな奴、ほっておいてコチラに！」
やっと罪人が静かになったので機嫌が良くなったキルトは、焚き火の近くに毛布を2枚ひき、枕を2つ置いた。
「何をしておるのじゃ？キルト」
「いつ魔物が襲って来ても良いように、わたくしめがメル様のお近くで休まなければと思いまして…」
とは言っているが、キルトの考えている事がそのまま顔に出ていた。
メルディアは、無言でキルトに近づき頭に強烈な一撃を入れると、毛布を離して寝始めた。
キルトの小さなため息が聞こえたが、余程疲れて居たのかそのまま意識は夢の中に落ちていった。

「おいっ！貴様！起きろ！」
どっぷりと夜がふけた真夜中に、キルトは静かに立ち上がり罪人の所に行き、腹を蹴っ飛ばす。
罪人は、目を擦りながら無言でキルトを見た。
「貴様…コッチに来い！」
罪人の胸ぐらを掴み、焚き火の光が届かない森の中に罪人を引きずり込んだ。
「度重なる巫女様への無礼な態度。そして、俺様への無礼な態度」
罪人を押し倒すと、持っていた剣の鞘で罪人を殴りだした。
「何故、こんな奴を巫女様は気にかけるんだ！」
なるべく顔は狙わずに、腹や背中や足をめった打ちにする。
「こんなクズ！早く呪いをかけて殺してしまえば良いんだ！このカ

スめ」
罪人は、なすがままされるがままに大人しくキルトの攻撃を受けていた。
しばらくして、気が晴れたキルトは最後に鞘を投げつけると、罪人をそこに置いて焚き火のある所へ歩き始めた。後ろでガサガサと、罪人が立ち上がる音が聞こえた。
キルトは振り返り罪人を見た。罪人は、やっと終わったか…と言った表情で、歩いていた。そんな態度に、また腹が立ったキルトは足元にあった石を罪人に投げつけた。
石は罪人に見事に命中して、また倒れる。それが、面白かったのかキルトは罪人が立ち上がる度に石を投げつけて命中させていた。
足元に石が無くなると、キルトはまた焚き火のある場所へと戻る。
焚き火は、まだパチパチと音を立てて燃えており、メルディアもグースカ寝ている。
キルトは横になり寝始めた。とりあえず、朝までは何も襲ってくる気配も無い。
寝る前に、適度な運動が出来た事もありキルトはすぐに夢の中に旅立った。

そして…朝が来る

トントントン…
グツグツグツ…
朝から良い匂いがして、メルディアは目が覚めた。
あまり、寝心地の良い布団では無かったが清々しい気分にはなれた。
「メル様待っててくださいね～。今、美味しい朝ごはんを作ってますので！」
キルトが手際良く朝ごはんの支度をしている。
メルディアは目をこすり周りを見渡した。少し離れた所で罪人が背

中を向けて寝ていたので、起こしに近づいた。
「お主も起きるのじゃ」
肩を揺さぶると、罪人は目を覚まし体を起こした。しかし、それだけの事だったがメルディアは目を疑った。
罪人は、あまり人目につかないように布の囚人服を着て手錠をはめて更に、薄いボロボロの布を1枚頭から被っているのだが…頭から被っている布が、真っ赤に血だらけになっていた。
昨日、寝たときは普通だったのに朝になったら血だらけなんて普通では無い。
「悪い…ちょっと良いかのう」
メルディアが布を取ると、血のついた石が数個ポロポロと落ちてきた。
そして泥と埃だらけな顔で、人殺しには見えなさそうなその顔も若干腫れていて、頭から血を流している。囚人服まで血だらけであった。
「キルト？なんじゃコレは…」
「薬草のスープ雑炊ですよ！朝はコレが一番です」
キルトは後ろを向いて作業をしていたので、メルディアの行動には気づいてない様子だった。
「コッチを向け！キルト！！」
メルディアが叫んだ。
「は…はいっ！」
ただ事では無いメルディアの声に、キルトは立ち上がり振り返りメルディアを見た。そんなメルディアの表情には、怒りが浮かんでいた。
「なんじゃコレは？と聞いておるのじゃ！」
メルディアの隣に血だらけの罪人が立っている。キルトは、すぐに頭をフル回転させて罪人に叫んだ。
「おい貴様！夜のうちに逃げ出そうとして、どっかに転んで頭をぶつけたのか！逃げ出そうとするから、罰が当たったんだぞ！」

持っていたオタマを罪人に向ける。夜中に、罪人を虐待していた事がバレたらタダでは済まないと、必死に揉み消そうといい加減な話に切り替える。
「本当の事を申せ！」
メルディアの冷たい視線と言葉がキルトに突き刺さる。
「メル様！わたくしが、あなたに嘘をつくわけ無いですよ！本当の事を言っております」
メルディアはしばらくキルトを睨みつけ、そうか…と返事をするとキルトに近づいてきた。
「今、出来ましたので…盛りますね！」
キルトは、すぐに作業に戻ろうと後ろを向いた。
「キルト…」
すぐに、メルディアが呼んで来たので振り返ると…メルディアの強烈な平手が、キルトの右頬を捉えた。

パァーン…

森の中に響き渡るその音に、鳥達が一斉に空に羽ばたく。
「私は、嘘と汚ない人間が大っ嫌いじゃ！お前は、嘘もつくし汚ない人間じゃ！」
メルディアは言い放つと、罪人の所へ戻り傷を癒す。
キルトは、メルディアに叩かれた事が余程ショックだったのか、その場に座り込む。
「キルト…」
メルディアがまた目の前に立ち手を差し伸べている。
キルトは、少し嬉しそうに手を伸ばすとメルディアが言葉を続ける。
「手錠の鍵を渡すのじゃ。私が持っていないとすると、お前が持っておるじゃろ」
キルトはもう逆らうまいと、正直に手錠の鍵を差し出した。
「あと、魔法銃も渡せ」

キルトは、メルディアが魔法銃と手錠の鍵を持つことで、自分を頼らない罰をするものだと思っていたが、その宛は見事に外れる。

カチカチ…カチャンッ

キルトは、手錠の外れる音に驚きメルディアを見た。
メルディアは、罪人の手錠を外し…更には、魔法銃まで手渡していた。
「メル様！アナタは、何をやっているんですか！！」
「ふむ…服は、リンリンの村で新調するとしよう。お主は、魔法銃を使うときは私を呼ぶが良い。その銃は魔力を込めなければ使えんからの」
キルトの叫びを無視しながら、メルディアはテキパキと事を進めていく。
「あっ…後、お主の名前じゃがな、村に着くまでに私が考えておこう！私はこう見えてもな、子供の頃はよく野良犬や野良亀に名前を付けてたもんじゃ」
呆気に取られて立ち尽くす罪人。この旅で、自分の役目は充二分に承知していたのだが…まさか、巫女に戦闘要員として加えられるとは思っても居なかった。
「メル様お待ちください！」
キルトが再度叫ぶ。
「メル様はお分かりですか？その者は罪人ですよ！人殺しです！その様な者の手錠を外し武器まで渡すとは！何をお考えですか！」
メルディアはキルトの顔を見つめ、静かに話し出した。
「この者は、罪人であるのは知っておる。しかし、この旅での役割は重要な役目を負っている。手錠をして、毎晩の様に貴様の遊び道具にされ…途中で息絶えられては困らん！ならば一層の事私は、奴に仲間になって欲しいと思っただけじゃ！」
キルトは返す言葉が無かった。このまま、メルディアに見つからな

ければ、毎晩の様に罪人をストレス解消の道具にしか見なかっただろう。
「分かったな！これからは、お前も奴も同等して扱う！今回の事でしかと反省するのじゃ！」
それだけ言い放つと、メルディアは荷物をまとめ始める。今は、この先にいるキラーラカントをどうにかしなければならない。
あの時、一旦退くと言う意思を誰よりも早く察知して状況を一転させたのは、他の誰でも無い…あの罪人なのである。
過去はどうあれ、この罪人…キルトよりも強いかもしれない。そう思った。
「メル様には申し訳ないですが…」
キルトは、そう言いながら剣を1本抜いた。
「罪人が手錠から抜けた時…武器を持ち反抗してきた時…理由はどうあれ始末してしまって良いと、わたくしは神官長様に言われております」
引き抜いた剣を罪人に向ける。
罪人は、自由になった手や足をグルグル回し、体を捻ったり柔軟運動をしていた。
「キルト！貴様は、まだ分からぬか！！」
メルディアが止めに入ろうとするが、キルトは片手で阻止する。
「メル様！これは大問題でございます。メル様の言い分も分かりますが、しかしですが…わたくしは、メル様の護衛です」
そう言うと、キルトは真っ直ぐ罪人を見た。
例え相手が、武器を使えない素人だろうが、過去に人を殺しているのだ。油断など出来ない。小さく息を整え、そして地面を踏み込んだ。
一気に決める為に、剣を振り上げ間合いを詰めると振り下ろす。
…ガギンッ！

鉄と鉄がぶつかり合う音が響いた。
罪人は、魔法銃の銀細工で出来ている所でキルトの攻撃を受け止めると、キルトの胸ぐらを掴み真横に投げ飛ばした。
体格的に、キルトの方が良い肉つきをしているのだが、罪人はいとも簡単に片腕だけで投げ飛ばす。
キルトを投げ飛ばした後、今度はメルディアに銃口を向けた。
魔法銃は魔力を込めなければ、弾は出る事は無い。
しかし、罪人が引き金を引くと、赤く纏まった光がメルディアに向かって発射された。

第４話：新しき仲間（後書き）

☆用語☆【キルトの装備】…剣を６本装備している。１本や２本折れた所で、痛くも無いがほとんど高級品。【高級品の剣】…武器屋のオヤジが騙して売った普通の剣。【魔法銃】…魔力を込めて、放出させる銃。込める魔力の強さによって威力や形状が変わる。【魔力】…この世界では、魔力を持つ者は一般に巫女や神官と称される。その中でも、精霊を呼べる人はスゴい。【メルディア・キルト】…２０代前半。【罪人】…１０代後半。

第5話：強化珠

子供の頃…、母に言われた事を思い出した。
『魔力を持つ者は、他とは違い特別な人間になれる』と…
父は、いつも嬉しそうに抱いてくれた。
いつの日か、精霊の声を聞くことが出来た。契約をすると、持っていた魔力が一段と強くなった気がした。

メルディアは、ふと我に返った。今のは、俗に言う走馬灯と言う物であったのか…
呆然と立ち尽くしていた。目の前には、銃口をコチラに向けたまま立っている罪人。その横には、地面に倒れた護衛のキルトがいた。
「巫女様！護衛！来るぞ！」
罪人の叫ぶ声が耳に入り振り返る。少し離れた場所に、昨日のキラーラカントが腕を押さえて立っていた。
罪人の撃った魔力弾は、メルディアの横を過ぎてキラーラカントに命中したのだった。
「うぬ？うむ…昨日の奴じゃな！」
やっと、現実に戻って来れたメルディアは身構える。
地面に倒れていたキルトも、バタバタと慌ててキラーラカントに向かい会った。
「巫女様は、後ろに下がって精霊術を奴の頭を狙い撃ちしてくれ」
罪人がメルディアの側まで来ると、指示を出す。
「護衛は、ひたすら攻撃をするんだ！奴の攻撃は、俺が受け止める。隙が出来たら、奴のもう片方の目を狙え！」
偉そうに指図をする罪人に、歯を噛みしめギャアギャア喚きながらも従う。
「しかし…お主、何故魔法銃を使う事が出来るのじゃ？」

罪人が、魔法銃に手をかざすとカチッカチッと音がして弾が込められる。
「何故…って、それは俺が、巫女の血筋が通ってるからだよ」
銃口をキラーラカントに向けられ弾が発射される。
「巫女の血筋じゃと？」
「巫女様…今は、話してる場合じゃないだろ」
メルディアは、前を向いた。キルトが、ブンブンと剣を振り回し、罪人がキラーラカントの斧を魔力弾で弾き返している。
メルディアは、罪人に言われた通りに頭を狙い精霊術を発動させる。
「火の精霊ウルマナンテ！」
メルディアの手から発射された火の玉が、キラーラカントの頭めがけて飛んでいく。
しかし、昨日効かなかった攻撃が今日効く訳など、そんな美味い話は無い。
火の玉は、頭に命中するが傷一つ負わない。
「ダメじゃ！私の魔力が弱くて、傷一つ負わせられないのだ！」
「大丈夫だ！もう一回撃て！」
罪人は振り返りもせず、ひたすらキルトの援護に回っている。
こうなったら、ヤケになるしかない。言われた通りにまた火の玉を頭めがけて放った。
「よし！今だ！」
罪人が空中に魔力を帯びた指で光の文字を描いた。いや…文字なのか分からないが、見たことも無い物であった。

”拡”

その文字？を魔法銃に込めて、火の玉に向かって放つ。
「拡散魔弾！」
白い光の魔力弾が、火の玉に飛び込むと支離滅裂に火の玉が弾ける。
さすがに、今までメルディアの魔法を気にもしていなかったキラー

ラカントだが、目の前で弾ける火の玉に驚き斧を投げ出し両手でガードをする。
その隙に、キルトは飛び上がり死に物狂いでキラーラカントのもう一方の目に剣を突き立てた。
キラーラカントの断末魔とも言えぬ雄叫びが、静かな森に響き渡る。
”剣”

罪人がまた魔法銃に、文字を込めると銃口から鋭い赤い光の刃が現れた。
「魔銃流！一文字波（まがんりゅう：ひともんじ）」
その剣を振ると、剣圧が固まりとなりキラーラカントの体を斬り裂いた。
「決着だな…」
魔法銃の刃は消える。キラーラカントは、そのまま地面に倒れると血の跡を残し体が消えていった。

「な…何者なのじゃお主は！！」
圧倒的な強さを見せた罪人に、ただ呆然と立ち尽くすメルディアとキルト。
「俺は、ただの罪人ですよ」
そう言うと、魔法銃をメルディアの足元に投げ両手を突き出した。
「なんじゃ？その手は」
聞くまでも無かった。罪人は明らかに、武器を捨て手錠での拘束を求めていた。
「巫女様…俺の役目は終わっただろ？」
「ならぬ！お主の役目は、完全に呪いを受け封印するまでじゃ！」
魔法銃を拾い上げて投げ返す。
罪人は、ふぅ…とため息をつくと、魔法銃を素早く拾い上げキルトに向かって1発撃つ。魔力弾は、キルトの前髪をかすり後ろの木に

当たった。
当の本人は、罪人の動き1つ1つに反応出来ずに固まっている。
「今、縛っておかないと…お前らを殺して逃走するぜ？」
まだ、銃口はキルトに向けられたままだ。
「私の勘じゃがな、お主はそんな事をする人間には見えんのじゃ」
そんな事をする以前に、人を殺している罪人なのだが…。そんな馬鹿げた事を言うメルディアが、急に可笑しくなった。
「…ったく、変な巫女様だぜ」
罪人は魔法銃を下ろした。急に自由になったキルトは、キーキー騒ぎだす。
「それと、お主の名前じゃが…ザイルでどうかの？」
「罪人だから、ザイルか？」
メルディアが自信満々に首を縦に振る。
「あー…別になんと呼んでくれても構わないけどな」
罪人――ザイルは、地面に落ちていたローブをまた頭から羽織る。
「メル様！罪人は、罪人1号とかで良いじゃ無いですか！何故わざわざ名をつける必要があるんですか！」
キーキー騒ぐキルトは、いきなりザイルに指を差す。
「貴様もだ！ちょっと強いからっていい気になるなよ！絶対に、お前より強くなってやるからな！」
ザイルは背中越しに手をヒラヒラと振る。
「くっそー！人を小馬鹿にした態度をとりやがって！罪人のクセに！」
また怒りが込み上げてくる。だが、迂闊に手を出すことは出来ない…何故なら強いから。
「ふむ…すっかり仲良くなったようじゃな」
ウンウンと頷きながら、2人の様子を見るメルディアだが、明らかな態度に否定するキルトと、話すら聞いていないザイルがそこに居た。
「さぁ、リンリンの村に向かうとするかの」

強敵キラーラカントを倒し、村に向かう道が開けた以上…次の目的地に向かい一行は歩き始めた。

キルトお手製の朝ごはんを森に残して……

「…と言う訳で着いたのう」
見上げる村は、リンリンの村。野菊や野草が至るところから生え、のどかな村だ。
「まずは、ザイルの格好を何とかするかの」
メルディアはキョロキョロと見渡し、服屋を見つけると嫌がるザイルをズルズルと引きづり服屋に直行した。その後ろをキルトがダラダラとついてくる。
「ザイルが服を選んでる間に、私らはこの村の神官に会いに行くとするか」
ザイルを店員に引き渡しながら、メルディアはキルトに話す。キルトも断わる理由も無く頷いた。
服屋の店員は、血まみれの囚人服を来た罪人を押しつけられ半泣きになっていたが、メルディアは見事に無視をし店から出ていった。もちろん…服一式買えるくらいのお金を置いてだが。

キルトは、村をグルリと見回した。王都アルカパサでは、巫女の旅立ちに大勢の町の者が見送ってくれた。それくらい、この封印の旅は大事な物だと思っていたが、王都から少し離れただけでこの村は、歓迎パーティーもしてくれず、村人が日がな1日を送っている。
「あ…メル様。罪人を置いてわたくし達が行っても大丈夫でしょうか？」
「ふむ…なら、お前も残っているか？私は大丈夫だと思うのじゃが」
「ならば、大丈夫でしょう。お供します」

いつもなら反対するのだが、折角の罪人も居ないメルディアと二人っきりになれるチャンス。断わる理由が見つからない。
もし、罪人が逃げたとしても…こんな小さな村（に見える）で見逃す事は無いだろう。
多分だが…確証は無い。しばらく村を歩き回る。
「メル様！彼方に、鍛冶屋がございます。これからの旅に備えて、メル様の武具を強化してはいかがでしょうか」
キルトが指をさす方向に、真っ赤に燃える大きな釜が見えた。
「ふむ…そうじゃな。お前にとっては良い判断じゃ」
メルディアとキルトは、大きな釜がある店に入った。
中に入ると、小さな店だったが壁の上から下まで鎖の先に小さな宝石のついたネックレスが、ビッシリと並んでいた。
「いらっしゃいませ」
人の良さそうな小太りの男がニコニコと近寄って来た。
「ここは、一体何の店なんじゃ？」
メルディアに聞かれ男が答える。
「こちらは、強化珠（きょうかじゅ）のお店でございます」
「強化珠…？」
聞き慣れない言葉に、メルディアは聞き返した。
「はい。強化珠とは、各々が得意としてる力を強化する珠でございます」
男は、チラチラとメルディアを見定めてからキルトをチラチラと見定める。
「お嬢さんには、コチラの強化珠がオススメかと思います。坊っちゃんには、コチラですね」
男が、脚立に登り上の方から紫の石のネックレスと赤い石のネックレスを差し出した。
「これが、当店では一番人気で一番高価なんですが、これから旅を続けるのであれば全然安い物でございます」
メルディアは、紫の石のネックレスを手にとる。確かに、手にとっ

た瞬間に不思議な力がネックレスから鼓動してくるのを感じた。
「ふむ…そうじゃな！では、この石とあの石と…もう1つ魔力を高める石を貰うとするかの」
「もう1つって…まさかメル様！あの罪人にも、そんな高価な物をあげるつもりですか？罪人なんて、ここにあるこの安っぽい石で充分ですよ！」
高価な物を大人買いしようとするメルディアにキルトは、店の片隅で売っていた小さな石を手に取る。
「これから、旅をするのじゃぞ？それに、ザイルの魔法銃を使う魔力には私も驚いたものじゃ」
ザイルから渡された石を払いのけ、店の主人に渡された石を買おうと財布の紐を解いた。
「巫女様…ちょっと待った」
ぼそっとザイルの声が聞こえてきた。
丁度、囚人服から着替えが終わりあまり目立たない服に着替えが終わったザイルが、先ほどキルトが持っていた小石を手に取る。
「まさか、貴様もキルトと同じ考えをしているのでは無かろうな？」
「そのまさかだよ…」
ザイルは、小石を2つ手に取り店主にそれを渡した。
「2つとも、ブレスレットにしてくれ。それと、あの出来損ないの石は買わないからな」
メルディアが持っている3つの石をチラッと見た。
「お兄さん…知ってるのか。こりゃあ、商売上がったりだな」
店主はすごすごと背中を丸め、寂れた小さな石を空のブレスレットにはめ込んだ。
「ブレスレット代はサービスするよ。この無色強化珠2つで、２０円だよ」
さっき渡された服のお金の余りを店主に払うと、メルディアとキルトに目を配らせて先に店を後にした。
「おいっ！罪人！待て！折角のメル様のご好意を無駄にしやがって

！叩き斬ってやる！」
キルトが後を追いかけて剣を抜こうと身構えるが先に、魔法銃の銃口が額に冷たく押し当たる。
「くくくぅ〜〜〜…」
キルトは、歯ぎしりをしながら剣から手を離すと同時に、ザイルもまた魔法銃をしまった。
「おい！ザイル！なんじゃお前は！これから、長く辛い旅じゃと言うのにそんなクズみたいな石を勝手に買いおって！」
ぷりぷり怒るメルディアの姿を見たザイルは、頭を掻いてため息をついた。
「ったく…巫女様も護衛さんも、何も知らないんだな…」
手の中で、只の小石に見える石のブレスレットをコロコロ弄びながら二人を見た。
「コイツは、知っての通り強化珠だ。強化珠と言うからには、自身を強化する為の道具なんだよ」
そんなのは、知っていると言う態度を見せるキルト。ザイルは、無視しながら話を続ける。
「さっき、巫女様が手に取った石は、成長しきった石なんだよ」
「成長しきった石じゃと…？」
「この石は、持っている者の力に反応して成長していくんだよ。だから、例え成長しきった石を使えど、強くなるとは限らないんだ」
ブレスレットを1つづつキルトとメルディアに投げ渡す。
「そいつをはめて戦ってれば、その者に通じた色に変わってくる。お前らの能力も底上げしてくれるだろう」
ザイルは、一気に話し終わりため息をついた。
「ふむ…それならいっぱい持てば、もっと強くなるのでは無いか？」
「残念だが…1＋1＝2になんかならねぇよ。この石をいくつ持とうが…、1×1＝1の計算になるからな」
ザイルは、背中を向き歩き出した。お喋りをするのも疲れたのだ。
「お主は、使わぬのか？キルトよりも強いお主が石を使えば、もっ

と強くなるじゃろ！」
メルディアの話を聞き、キルトが落ち込む。自分でも分かってはいたが、改めて言われると凹む。
ザイルは、背中越しに魔法銃を取り出して、束の部分を見せた。小さな青い石が埋め込まれていた。
「それが、お主の強化珠なんじゃな…」
やっぱりあったのかと安堵の息を洩らしてから違和感を覚える。
「ちょ…ちょっと待つのじゃ！」
メルディアは走りザイルの近くに寄る。
「何故、お主の強化珠が魔法銃に埋め込まれておるのじゃ！」
なんとなく気づいていたが、なんとなく質問をしてみる。
「それは、俺がこの魔法銃の持ち主だからだよ」
それ以上ザイルは口を開かなかった。
メルディアもそれ以上に聞こうとはしなかった。
ザイルがこの武器の持ち主ならば、きっと殺害した時の武器は、変わらずこの魔法銃なのだから。
ザイルは足を止めた。メルディアもつられて足を止めると、目の前に大きなドーム型の神殿が建っていた。
メルディアの背中に背負っている封印の剣が小さく鼓動をしているのが感じ取れた。
「まさか…この村に…第一の呪いがあるのじゃな」
メルディアの見る視線の先にある神殿の扉が、奇妙な音を立てて開いた。

第5話：強化珠（後書き）

★用語★【強化珠】…自身の力を底上げする珠。いっぱい持っても意味は無い。最初は無色だが、成長と共に色がついてくる。紫色は、主に魔力が強い者に…赤色は主に近距離攻撃が得意な者に…その他にも、遠距離が得意な者は黄色や補助魔法が得意な者は、白と言った感じに別れてくるが…他にも沢山ある。その割り当てもどの様に変わってくるのかも…未だ研究中である。

第6話：第一の呪い

「巫女メルディア…護衛キルト…そして生け贄となる罪人よ…その扉から中にお入りください」
扉の中から声が聞こえてくる。メルディア達は声に従い、扉の中へと入っていった。
神殿の中は、窓が無く暗いと思っていたが、蝋燭が楕円状に置いてあり更に奥に地下へ降りる階段と、その手前に大人びた女が座っていた。
「巫女メルディア…」
女が立ち上がりメルディアを見た。禍々しい衣装を帯びて不思議な雰囲気の女だ。
「そして護衛キルト…」
女がキルトを見る。それから、ザイルを見て…またキルトを見る。
「あれ？どっちが護衛なの？」
メルディア達3人を見る。明らかに、男2人は二人とも武装している。
「おお…すまぬ。こっちの剣士が、護衛キルトでこっちの無愛想な奴が罪人のザイルじゃ」
神官は、キルトを見てからザイルを見た。
手錠をしてなければ、旅を共にする巫女様にも敬意を払っている訳でもない。ただダルそうにコチラを見ていた。
「巫女様…この者の手錠は？」
「ああ…それなら、捨ててしまったわ」
当たり前の様に答えるメルディアに、巫女はバタバタと出口の方に走りだした。
「待つのじゃ！何をそんなに慌ててるのじゃ！」
メルディアが慌てて神官を押さえつける。

「巫女様！この旅に連れて行く罪人は、超極悪非道な罪人ですよ！罪を犯して、法で裁ききれないくらいの罪を犯してるからこそ！こうやって最後は、人々の希望になる人柱として旅に同行出来るのです！…それを、その罪人の手錠を捨てたなんて…」
「良いから待つのじゃ！ザイルは、決して人を襲ったりしない奴じゃ！私は、アイツを信用してるからこそ、手錠を外したのじゃ！」
メルディアの説得が効いたのか、神官は走り出すのを止めた。そして、ザイルを見る。
瞳の奥底に暗い闇が見えるその表情。超極悪非道な罪人の割には、襲って来る気配も無い。だからと言って、信用も出来ないのは確かなのだが。
神官はコホンッと咳払いをすると、歩き出してザイルの目の前に立つ。
「分かりました。巫女様がそこまで言うのなら、私もこの罪人を信用するとしましょう」
ジッとザイルの顔を見る。
泥だらけで、笑うことなどしない…ただ無表情のザイル。
「それでは、罪人ザイルよ…アナタが犯した罪をここに告白しなさい」
「何でだ？」
ザイルは、聞き返した。
「今、この神殿には悪魔王の呪いが1つ存在しています。貴方は、5つの呪いを身に宿すまで自分の犯した罪を告白していき、最後の呪いを宿すときに罪の全てを告白した時、貴方の罪は許され聖人になります。そこに、巫女様が貴方に封印の剣を刺してこの旅は終わりを迎えます」
少し間が開きザイルが口を開いた。
「くだらねぇ冗談だな…」
鼻で笑い一番怪しそうな奥の扉に向かってザイルは歩き出した。
「待ちなさい！これは、貴方だけの問題じゃないのよ！悪魔王の呪

いを受ける儀式みたいなものなの！貴方が話さないと言うのなら、ここに憲兵を呼び貴方を一生牢獄に閉じ込める事も出来ます！」
神官が手をかざすと、手の中に杖らしき物が現れる。
ザイルの前にキルトが立ちはだかり、メルディアもザイルの動きに合わせて精霊術を放つ姿勢をとる。
「お前ら3人で俺が止められると…？」
背中越しに神官を睨む。
キルトは、姿勢を低くして剣に手を伸ばしていたが、ザイルの強さはキルトとメルディアで本気でやりあった所で勝てそうにも無いくらいの強さだ。
自然に手がカタカタと震えてくる。
「さあね…でも私も、昔は巫女候補の一人だったのよ。実力だけなら、貴方に負ける気はしないわよ」
「そうか…」
ザイルは、静かに魔法銃に手を伸ばす。それを見たキルトは、呼吸を整え低い姿勢のままザイルに切り込む。
それと同時にメルディアは、ザイルに向かって精霊術を解き放った。

まず、切り込んできたキルトを軽くあしらうかの様に剣を受け流し足を引っかけて転ばすと、次に飛んでくる火の玉を左手で払いのける。その僅かな隙をついて、神官が下から杖を突き上げてきた。
ザイルは、その杖をかわす事なく掴むと神官を引き寄せた。
「確かに、実力だけはあるようだな」
ザイルがニヤリと笑う。
「ええ…貴方もね」
神官もニヤリと笑う。
ザイルは、神官の杖を離すとため息をつき両手を上に上げた。
「降参って奴だな…」
ザイルは、目の前に転がっているキルトに目もくれず、奥の怪しそうな扉から離れた。

「アンタのその体術は、北の都アルカパサの物だよな？」
「あら？よくご存知ね」
「俺も、アルカパサに居たからな…」
「貴方もアルカパサに…？貴方の魔法銃…もしかして…」
神官はザイルの魔法銃を見ると、何かに気づき口を出したが、ザイルが一発だけ上に魔力弾を放つその音で神官の言葉はかきけされた。
「神官さんよ…俺は、アルカパサで人を殺した罪人なんだよ。それ以前もその後も無いんだ」
神官は、口を閉じた。ザイルについて何かを知っている様だった。メルディアが駆け寄り問いただそうとしたが神官はそれ以上何も話さなかった。
「なんじゃお主は！自分だけ全てを知った風にしおって」
「焦らないで巫女様。今ここで、罪人ザイルの全てを告白してはいけないの…。時が経てば、全てを知ることが出来るはずだから」
神官はニコリと笑うと、奥の怪しそうな扉の前まで歩き出した。
「さぁ、巫女メルディアと罪人ザイルよ！この扉の奥へと進みたまえ！」
神官が何やら印を結ぶと、扉が重そうにゆっくりと開き出した。
「んっ？メル様と罪人1号だけで、私は入れないんでしょうか？」
キルトが慌てだす。
「はい。貴方のお仕事は、巫女様を呪いに導くまでの護衛ですので。コチラでお待ちください」
神官が笑顔で返す。
「心配するでないキルトよ。お主は、行儀よくここで待っておれ」
メルディアは、早足になりながら扉の奥へと入って行った。その後に、ザイルと神官も入っていく。
「くっそ～！メル様の護衛の筈なのに！何故、俺様がここで待ってないといけないのだ！」
そんなキルトの嘆きも虚しく、扉はゆっくりと閉まる。

「さぁ巫女様。コチラへ」
薄暗い球状の部屋の中、メルディアは神官に導かれ、何やら台座の上に座らせられた。
「罪人ザイルはコチラへ…」
部屋の中央らへんに座らせられる。同じ部屋の中とはいえメルディアとは、かなり離されていた。
「罪人ザイルよ…本当によろしいのでしょうか？」
神官が小さな声で囁いた。
「何がだ？俺がここで嫌だって言ったら、免除でもされるのか？」
「他の罪人でしたら、その願いは無理でしょうが…貴方は、あの事件は無実を証明出来るハズではないですか？」
ザイルはため息を一つつくと神官の目を見た。
「理由はどうあれ…領主様を殺したのは俺だ。人を殺した罪は裁かれなきゃならない…」
「しかし…呪いを受ければ、貴方には死しか待ってないのよ！」
つい声を荒げてしまう。メルディアが遠くからコチラをずっと見ている事に気づき咳払いを軽くして誤魔化す。
「分かりました。罪人ザイルよ…貴方の体に、悪魔王の呪いを刻み込みます」
神官はメルディアの元へ行くと、手を差し出す様にと命じる。
メルディアは左手を差し出すと、神官はその上に印を書き出した。
「今、巫女様の手の上に、悪魔王の呪いが乗っています。それを巫女様の魔力と一緒に、あの罪人に送り込むのです」
イメージとしては、黒い不気味な塊を持っている感じがする。その塊に精一杯魔力を込めてから、メルディアはザイルの元へと歩き出した。
「では、行くぞザイルよ！」
ザイルは無言でメルディアの顔を見た。少し悲しげな表情をしていた様な気がした。

呪いを受けたら待つのは死のみ…確かにそうなのだが、今一度…自分の犯した罪を見つめ直しそして呪いを受ける覚悟を決めたのだ。もう迷う事など無い。
メルディアがザイルの体に呪いを注入する。何が起きるかなんて誰も分からない。
「う…あああああ！！！」
急にザイルが右手を押さえてうめきだした。
体の奥底から何かが沸きだしてくる…メルディアの魔力と悪魔王の呪いの力が、体の中を暴れ回る。
「……ざけんな…」
ザイルが小さく呟いた。
「…ふざけんな！呪いの分際で、俺の体を乗っ取ろうとするな！」
ザイルが左手で文字を空中に書き出した。また、誰も見たことの無い文字であった。

”鎮”

その文字を、腰に差してある自分の魔法銃に込めると、そのまま魔法銃で自分の右手を撃つ。
魔力弾が腕に当たると、腕は部屋一面に入りきらない程の光を発した。
光が収まる頃には、呪いはザイルの体に取り込まれていた。ザイルは腕を押さえながら立ち上がる。
「だ…大丈夫か？」
メルディアが心配そうに声をかけた。必要ならばと、回復術をかけようとザイルの右手に近づいた。
「……大丈夫だ」
ザイルはそれを阻止して、扉に向かって歩きだした。
ザイル自体、何も変化が無いように見えたが、そうでも無かった。
メルディアを振り払った時に、見てしまった。ザイルの右腕から首

の辺りまでかけて、黒い模様が浮かび上がっていた。
まさしくそれが、悪魔王の呪いなのだから。
「神官さんよ…扉を開けてくれ。次の呪いを受けなくちゃいけないんだからな」
落ち着いた雰囲気で神官に話しかける。
「ええ…分かりました」
神官は言われた通りに扉に印を結ぶと、また扉が重い音を立てながら開いた。
「メル様ぁ～！ご無事でしたか！」
心配そうにメルディアの元へ駆け寄るキルトを尻目に、ザイルはさっさとこの神殿から出ていこうとしていた。
「ちょっと、焦りすぎじゃないの？」
神官が話しかけてきた。
しかし、ザイルはもう用は無いと言った感じに無視する。
「この呪いは、罪人が罪を見直して自分自身で認めれば、あんなに苦しむ事は無かったの…やっぱり、貴方はあの事を認めてないんじゃないの？」
ザイルは黙って話を聞いてるだけで、何も答えない。
「もうここには用は無い…あんたにも用は無いし、二度と会うことも無いだろう」
パタパタと背中越しに手を振り出口に歩き出した。
「もう二度と会うことも無い…か」
神官はニヤニヤと怪しげな笑みを浮かべながらザイルの背中を見ていた。
その後ろで、バタバタと派手な足音を立てながらメルディアとキルトが走ってくる。
「世話になったのぉ」
メルディアは、軽く挨拶を投げ掛けザイルを追いかける。
「巫女様！お願いがあるんですが…よろしいですか？」
神官は、巫女を呼び止める。その際にも、ザイルは一人で歩き出し

ていたので、キルトに任せて一人神殿に残った。

「待て待て待てぇ～い！コラッ！罪人１号！歩みを止めるのだ！」
神殿の外をボツボツ歩いているザイルの背中からキルトが叫ぶ。しかし、ザイルは気にも止めずに歩みを止めない。
「ぜぇぜぇ…待てって！コラッ！……ぜぇはぁ」
別に急いでいた訳では無いが、キルトが追いつく頃には神殿からかなり離れていた。その為か、キルトはかなり息を切らしていた。
「やっと…追いついた……はぁはぁ…」
キルトに肩を掴まれザイルは頭をポリポリ掻きながらキルトを見て一言呟いた。
「護衛さん…体力無いな…」
「なんだと！」
とは言ってみた物の…確かに言われた通りなので黙る。
「巫女様は、どこに居るんだ？」
てっきりキルトの後ろから息を切らしながら走ってくると思っていたのだが…そんな事はなく、姿が見えなかった。
「メル様は、今は神官様と大事なお話をしているんだ！それはそうと、この際だから貴様に言っておく事がある！」
ザイルは面倒臭そうに耳を傾ける。この護衛が言いたい事なんて、大体想像が出来る。巫女の事だろう。
四六時中、巫女の事しか考えてそうだ。しかし、そんなザイルの想像もアテが外れた。
「俺様をもっと強くして欲しい！！」
ザイルの目が点になる。予想だにしなかった言葉が、キルトの口から飛び出して来たのだ。
「貴様の強さを認めよう！だが、貴様が強いせいで…この俺様が目立って無いのだ！！だから、貴様に俺様を強くするための修行の権限を与える！」

人に物を頼む態度では無いのだが、言われてみればこの男。護衛と言うわりには、対して強くもない。
「分かった分かった…なら、俺の言うことをちゃんと聞けよ？」
「くっ…俺様が罪人の言うこと聞くのか…」
キルトのプライドにさわる。仕方ないと言ったら仕方ない事なのだが…
「大丈夫だ。護衛さんの修行以外で、口を挟む事は無いからよ」
それならば…と、渋々キルトは首を縦に振った。
「なら、その腰についてる5本の剣を売って、1本だけ選んで装備してこいよ」
「なんだと！貴様は、俺様の銘刀コレクションを馬鹿にするのか！」
未だに、銘刀と言う名の駄作の剣をぶら下げ騙されてる事に気づいてない。
それに、理由はもう一つあった。
「護衛さんのコレクションかどうかは俺は知らない。だけど、俺が見ている限りでは…護衛さんの、二刀流なのか六刀流の剣技はあまりにも不格好だな」
「ぐっ…」
本人でも気づいていたのか、何も言い返さない。
「基本を二刀流にしてるのだろうけど、力の入れ具合を間違えてるな。見た目を気にしてるのか？なら辞めた方が良い！強くなりたいんだったら、その銘刀駄剣を1本に絞るんだ」
そんな事を話していると、神殿の方から人影が見えた。メルディアともう一人。
神官が付いてきてるのだ。多分、見送りか何かだろう。
キルトは、メルディア達に気づかずに武器屋に走り出していた。多分、あの剣は売った所で大した金額にはならないだろう。
昔見た銘刀：麒麟刀は、もっと麒麟の様に刀身が細長いものだ。騙されてると言う事に気づき怒り狂うかもしれない。
そんなキルトを見るのも一つの余興だな…とザイルは密かに微笑ん

だ。
「何笑ってんのよ…いやらしい～」
ザイルは声がした方を見た。そこには、さっきまでの堅苦しい服装では無くラフな感じな神官が立っていた。
「秘密が多い男ほど、いやらしい物は無いのよね～。ねっ？メル？」
さっきまでは、堅苦しい雰囲気だったのに…今では巫女と友達と言った感じに軽い空気を醸し出していた。
「うむ…そうじゃな！ザイル！いやらしいぞ！」
ザイルは、とにかくこの軽い感じが嫌いであったので何も言わずにメルディア達に背中を向けると、とっとと歩き出した。
「ちょっと！待ちなさいよ！何か言うこと無いの！何で神官が、こんなラフな格好してんの？とか…色々と！」
神官が後ろでキーキー甲高い声を出し騒ぐ。
ザイルは振り向かずに背中越しに手を振りながら一言…
「興味無い」
「興味とかの問題じゃないでしょ！折角、私がこうやって旅に同行するって言ってるのに！」
「頑張れよ」
まるで他人事の様に片付ける。なんとなくだが、大体は予想が出来ていた。
「ちょっとメル様！ザイル君のあの態度！人として注意すべきじゃ無いですか？」
神官に言われメルディアは困った顔をした。
「あいつは、注意しても聞かぬのだ…」
困るメルディアに背を向けて、ザイルの方に走り出した。
「それから！私の名前は、『ヒコ』だからね！コッチの事情で、神官さんとか呼ばれると迷惑だから呼ばないでよね！」
「分かった分かった…ヒコ」
ザイルは少し面倒臭そうに返事を返した。
「呼び捨て！？…まぁいいか。改めてヨロシクね！ザイル君」

ヒコは、わざわざザイルの前に回り込み笑顔で握手を求めたが、ザイルはそれを避けて出口に向かう。背中に突き刺さるヒコの怒りの視線を感じながらもザイルは気にせずに歩き出した。

第6話：第一の呪い（後書き）

★人物紹介★【ヒコ】…村の神官。巫女の候補であったが、落選して嫌々ながらも神官を務めていた。落ち着いた感じであったが、普段は明るい性格。本人は、巫女の役に立ちたいと言っているが、何か事情があり一緒に旅に同行する。神官と言うイメージがあるが、戦いは近距離が得意。北の大陸の武術を得意とする。何故か、ザイルの罪を唯一知っている。／／【キルト】…恥を忍び図々しくもザイルに剣を教わる事にした。性格は一朝一夕に変わる訳は無いが、武器屋に自慢の剣を売り払い、その金で1本だけに絞りたかったが、剣が余りにも売れず結局は自分の財布からお金を出して一番高い剣を買った。／／【村の武器屋のオヤジ】…変な客に、安物の剣を高く売られそうになり困っていたが、旅をしていた巫女が店に入るなり変な客を殴り倒してくれた為に、詐欺に合わずにすんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8816x/

ファンタジスタクランチ〜悪魔王の呪い〜

2012年1月3日04時52分発行